

第十回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

徳永 恂 著『ヴェニスのごットーにて 反ユダヤ主義思想史への旅』

(1997年6月20日 みすず書房 刊)

徳永 恂 とくなが まこと 昭和4年(1929)生まれ。埼玉県出身。

専攻は、哲学・社会思想史・ドイツ現代思想。東京大学文学部哲学科卒業。フンボルト研究員としてドイツ、アドルノに師事。イスラエルへ研究留学。大阪国際大学政経学部教授(受賞時)。現在は大阪大学名誉教授。著作は、主著に『社会哲学の復権』、『現代批判の哲学』、『結晶と破片』、『フランクフルト学派の展開』、『ヴェニスからアウシュヴィッツへ』、(受賞作の改訂・増補版 講談社「学術文庫」)、訳書に、マンハイム『イデオロギーとユートピア』、アドルノ・ホルクハイマー『啓蒙の弁証法』、他がある。

受賞のことば

昨秋、椎名麟三展の折にはじめて姫路文学館を訪れ、郊外を歩いて和辻さんの思想そのものの風土性を憶った。和辻さんの仕事のうち、私としては、体系的の勝った「倫理学」などよりは、精神史や芸術史、あるいは特定のジャンルに尽きない自由な小品のようなものが好きだ。体験する主体の動きにつれて開けていく地平に展開される自由な思索への沈潜。それは期せずして私のつたない思索行のモデルになっていたのかも知れない。

《選考委員評》

目を洗われる好著

陳 舜臣

和辻哲郎文化賞も今年で第十回の節目を迎えた。毎年のことだが、今年も目を洗われるようなすばらしい作品に恵まれることを期待して候補作を読んだ。そして期待は裏切られなかった。

いつもの年なら候補作を二、三篇にしぼりこみ、それについての議論がかわされることになる。ことしはしぼりこみを早くするために、会が始まると同時に、投票によってそれぞれの意中の作品をえらぶことにした。ところが、『ヴェニスのごットーにて』が、満票ということになり、開会と同時に受賞作は決定したのも同然であった。

この作品は和辻哲郎文化賞にぴったりであった。あるいはこの賞は、このような作品の出現を待っていたといってもよいだろう。

学問的境界線と形式的ジャンルの枠という二つの深い分界溝を、気負いもなく乗り越えたことに、惜しめない拍手を送りたい。すくなくとも和辻の名を冠する賞であれば、論文、エッセイ、紀行文で織りまぜられたこの『ヴェニスのごットーにて』は、見逃してはならぬ対象であるはずだ。抽象的レベルと具体的レベル、思弁と実証が交錯していると、徳永氏みずから述べておられるが、その交錯がじつにしぜんであり、しかもみごとである。

スペインにおけるユダヤ人たちは、十五世紀末ごろまではイスラムと運命を共にしている。「スペインにユダヤ人迫害の跡を追う」のところでアラブ対ユダヤの抗争は、せいぜいここ七十年ほどのパレスチナをめぐる土地争いにすぎない、とある。これは私たちの意を強くさせる叙述であった。モンゴルの歴史を学ぶと、両民族の抗争は宿命的なものかと思ってしまう(十三世紀末のバグダッドの虐殺など)。だが、よくある隣人のいさかいを拡大して見ることがいかに危険であるかを知った。げんにスペインを追われたユダヤ人はおなじ「啓典の民」として、オスマン・トルコにあたたかくうけいれられている。とくにバヤジット二世は熱心であった。私はイスタンブールのシナゴークを参観して、そのことを痛感した。そして両教徒の友好が長かった事実があまり取りあげられないことを残念に思う。

なお本書第二章の「マルクスと反ユダヤ主義」は、最近の好論文である。

梅原 猛

選ばれた五編の候補作品のなかに、徳永恂氏の『ヴェニスのゲッターにて』を発見したのは大きな喜びであった。この和辻哲郎文化賞には過去いろいろすぐれた作品が選ばれたが、その多くはよく私が知っている著者であった。しかるに今日まで私が著者の名をも知らなかったこの作品は、過去において受賞したいかなる作品と比べても遜色はない。私はこのようなすぐれた本を書く、私とそれほど年齢が離れていない著者を今日まで知らなかった不明を恥じるのみである。

徳永氏はユダヤ人問題の研究者である。彼は、ユダヤ人問題をヨーロッパの陰の歴史と考える。スペインにいた大量のユダヤ人が宗教的圧迫を受けて、主としてドイツや東欧に亡命する。徳永氏は、あのコロンブスの輝かしき業績といわれるアメリカ大陸の発見にも、ユダヤ人問題が大きな影を落としているのではないかと考える。そしてあのアドルフ・ヒトラーによる世にも残虐なユダヤ人の抹殺。この裏の歴史を考えずにヨーロッパの近代史は明らかにならないと徳永氏は論ずる。

徳永氏はマルクスの思想をも、マルクスが改宗したユダヤ人であったことをもとにして解明しようとする。マルクスに対する徳永氏の追求は執拗を極め、ユダヤ人マルクスにおける自己憎悪という概念でマルクス主義を理解する最近の学説を紹介するが、徳永氏は必ずしもそれに賛成していないようである。もし著者に注文があるとすれば、この点について徳永氏独自の説の言及がもう少しほしいことである。

何よりも文章がよい。リルケの詩を引用しながらヴェニスのゲッターの意味を明らかにするところなど、一つの詩になっている。私はこの本を読みながら、林達夫氏のことを思い起こした。博学で、そして批評が的確で、文章が明快で情趣がある点、林達夫氏が新しい思想をまとめて生き返ったような幻想を私に抱かせた。

徳永論文を推す

中野 孝次

近頃は著者がなぜそういうことを調べ、考え、書いたか、というモチーフのはっきりしない論文が多い。やたらに事実の末梢を追い、重箱の隅を楊枝ではじくるような作業に専念する。そういう論文は読んでも少しも展望がひらけず、読むのも苦痛な上に、なによりもまず著者はどんな興味からこんな辛気くさい論文を書いたのだろうと疑われるのである。

選考会の席上上田正昭氏にうかがうと、歴史学会でもその手の視野の狭い、瑣末ばかりを論じる論文が多いので困っているということであった。からっとした展望をひらいてくれた司馬遼太郎の文学とまるで逆をいっているのばかりだという。

今回の候補作の中にもその手のものがあって弱ったが、徳永恂『ヴェニスのゲッターにて』は、なぜ著者がこの問題に熱中するかのもちがよくわかるもので、しかもその問題追求の仕方が全身的でよかった。全身的とは、その問題の所在をまず嗅ぎあてると、その現場を訪れてわが目でそのありようをとくと見て調べる。さらに想像力によって事態を構成し、史料によってたしかめ、そうやって歴史の無の中に事柄を明らかにしてゆくやり方が、たんなる書齋の学究とちがうということである。

従って、この論文はある意味では紀行文であり、旅先での思考であり、史料による実証であって、全身の機能を使つての対象への迫り方があくまで著者独自のものなのだ。今回の候補作の中ではこれが断然優れ、全員一致での決定となった。たまには意見がちがって議論を試みたいと冗談が出たくらいである。ともかくわたしも久しぶりに全身で書いた文章を発見してよるこんだ次第であった。